

講 話

日本住血吸蟲の中間宿主たる
小螺の學名に就きて 岩川 教授

本日學術談話會に於て片山病の講話があると承りましたから、其の病原蟲の中間宿主たる小螺の分類上の所屬及び學名の鑑定に就き、余輩は直接に關係致しましたから、其の次第を荒増申し上げて見たいと思ふたのであります。

一昨々年、即ち大正二年の暮侍醫の土屋博士が五島博士の紹介を以て偶然自宅へ訪問せられ、此の貝を持參して分類上の所屬及び學名を御尋でございました。然るに私は去る明治廿四五年頃より皇室博物館の命に依り、本邦内地の淡水産貝類を採集し、今猶研究し居るに拘らず此の貝を見るのは今回は初めにて即答することが不可能でありました。従て更に調査を約して別れました。夫れより博物館所藏の標本と段々對照し見る所が、貝殼丈では *Truncatellidae* の *Blanfordia* に酷似して居る、併し不安心でありますから、土屋博士に活物標本の寄贈を所望致しました。然る所同博士は住血吸蟲病の流行地たる山梨縣へ態々出張し、澤山採集してこれを送つて呉れました。其

の際 *Blanfordia* に近いものだと語り、又醫科大學の入澤内科に居て、矢張り此の原蟲の研究に従事し居らるゝ宮川醫學士も、學校へ來られて學名を問はれましたから、前同様の答をしました。然るに同學士は或る醫學雜誌に *Blanfordia* の名を伏聽せられた爲に、其の名は一時研究者間に通りものと成りました。

爾來余輩はこれを飼ふて習性を調べ、傍ら大學及び博物館にある貝類の書を繙き、愈々解剖を試みんとせしが、此の貝は最大のものも八密迷を超えず、普通六七密迷の小貝ゆゑ、随分苦心して解剖して見ると、豈圖らん *Blanfordia* は肺囊を有して厩なき筈なるに、此の貝には大なる鰓があつて、肉眼では見えぬが鏡下には立派な厩を持つて居ります。是は飛んだ間違をしたと悔んでも及ばず、夫れより段々文献に徴して見ると、此の貝は本邦に未だ代表者なき *Hydrobiidae* に屬するものにて、*Hydrobia* に近き一種であると鑑定が附きました。依て土屋博士と宮川學士に粗漏を謝して *Blanfordia* の名を取消したのであります。次に此の貝の中間宿主たるを發見したのは、九州醫科大學の宮入博士でありまして、佐賀縣の標本をも見たいと存じましたから、同博士に依頼した所、是又活物標本を澤山送り呉れました。従てこれも飼ひ置て山梨産に較べて見ますと全く同種でありました。

一昨年来、キャベヂの葉を與へて飼ひましたが、暖に成るに従ひ死するもの多く、三ヶ月に亘りて活きたものは稀でありました。又夏期に近いて子を産むものもありましたが、其の子は如何しても能く育ちません。彼等は冬期に入りて如何に越年するか知りたいと存じましたから、昨年一月、冬期休業中、山梨縣に微行し、甲府から約一里許隔つて居る、中巨摩郡大鎌田村に至り、或る人の紹介に依て同村の開業醫三神三朗氏の宅に一泊しましたが、同氏は片山病流行地に居らるゝ醫師ゆゑ、該患者に關する實驗談をも聽取することを得、又採集の際冬籠の状況を視察するにも、非常に便宜を得ました。

同氏の案内にて田圃へ採集に出で見ますと、東西に跨つて居る深い溝には所々に水は溜つて居ましたが南北に跨れる數多の淺い溝には一滴の水なく、殊に冬期である爲に一面に霜柱を立て居ました。同氏の言に依ると、是等の溝は夏期水田へ水を引く爲に用ひらるゝもので、其の節には水一杯に漲り、貝は無數是に生息して縁に繁れる草の莖や葉に皆附着して居る。今は草も枯れ果て居り、自分も今頃は注意したこともないから、貝は如何して居るものかと頻に搜して呉れたる所、やがて霜柱の本に二三疋を獲ました。これに力を得て能々搜し見ると、枯草の根にも土中に多少埋れて居るのも無數蟄伏して、

試に一尺四方の面積を限り、採集せる個數を算へ見しに八十疋以上ありました。夫れより東西に跨つて居る深い溝の水底を細い眼の篩で掬ひ見ましたが、二三の死殻の外一疋も獲ませんでした。斯く南北に跨れる溝にのみ蟄伏し居るのは畢竟暖を取るの便あるに原因すると考へられます。兎に角彼等は餘り深く土中に埋れず、殆ど凍死せるものゝ如くに殻口を堅く塞ぎ、霜柱の間に轉り殻の表面は乾燥して居りましたが、東京へ持ち歸りて水へ入れると悉く蘇生しました。是にて冬期越年する状は分りましたが、今後産卵發育の模様を調査したいと思ふて居ますが、其の暇のないのを遺憾に存じて居ります。

前申した通り、所屬は略分りましたが、我が國には参考書の乏い爲に種名を確定することが出來ず、慥に新種と思ひましたが、迂濶に命名する譯にも參らず躊躇して居りました。當時京都の平瀬氏へ標本を送り、自分は *Blanfordia* に近きものと信ずる旨を申し送りました所、同氏も未だ採集したることなく、所屬に就ては同感である。猶此の貝を直に北米のビルスブリー氏の許へ送つたと返事がありましたから、遠からず同氏が學名を發表せらるゝであらうと待て居りました。然るに、昨年五月頃、海軍醫學校の教授今博士に邂逅して、談偶々此の中間宿主に至りました所、其の貝の記事は近頃當着せる英國の醫

學雜誌に載つて居たと聽きましたから、早速借用して讀んで見ました。

所が、大正二年英國の殖民省は倫敦の熱帯病研究所へ資金を提供し、住血吸蟲病研究の爲め一隊の學者を東洋へ派遣することとなり、海軍省では之れを補助する爲にアトキンソン軍醫を同行せしむることとなり、そこでドクトル、ライバ氏は一行を率ひ、大正三年の二月本國を解纜して東洋に向ひ、上海に本部を置いて支那の諸方及び我が國に研究者を分遣せり。其の際本邦に渡來せる一行は昨秋宮入博士が中間宿主を發見せられたるを聞知し、該病本原地たる片山地方に至り、此の貝を澤山採集し、上海に歸りて研究中、同年八月歐洲の大戦争勃發した爲に、同隊は急遽本國に引き揚げ、其の際これを活かして持ち歸られたが、大概船中で死した爲に、解剖上の研究は未だ不十分であるがと言つて、一行中のロブソン氏は其の學名を發表せられました。

同氏は此の貝の所屬及び學名の査定の爲に、支那及び東洋諸國の陸産及び淡水産貝類の凡る著書并に雜誌を調べしが一向に見當らない、地方に依て斯くも多數産出するものなるに、何故に從來一疋も採集せられざりしか、實に不可思議であると言ふて居ります。余輩は本邦内地の淡水産貝類を専門的に調べ、極めて細かいものまで

も注意して採集せしも、京都の平瀬氏と共に未だ曾て此の貝に出會はぬのは實に奇態と思ひますが、畢竟此の貝は地方病に關係ある如く、地方を限りて産する所より、吾人は偶々其の地方に採集せなかつた爲と思ひます。此の事に関してスミツス氏の言はるゝに、英國の動植物は細大漏さず最も古くより綿密に調査され居るに係らず、*Palustrina jerkinsi* (今回の本邦産に近き種類)の初めて發見せられたときには、矢張り多數産出するに拘らず、從來全く知れて居なかつた、況や日本の如き新開國に於ておやといふ調子に申して居ります。

ロブソン氏は片山地方より持參した貝を解剖し、又 *Hydrobiidae*の専門家グアドキン氏に依頼して、其の齒列を他の諸屬と比較せしが、*Hydrobia*を模範として *Pyrgulopsis*屬に近似すれども、是とも多少異なる所あり、同科中既知の諸屬に編入し能はざるが故に、假りに新屬新種とすると言ふて左の學名を發表せり。

Katayama nosophora Robson かたやまがひ(新名)

初めより慥に新種であると察しましたが、如何にせん我邦には参考書乏しく、殊に此の科の種類は初めて發見されたのでありますから、比較すべき模範標本もありませんゆゑ、手を拱きて外國の學者に委ぬる外ないのは眞に遺憾と存じます。

最後に今回の事に就き、吾人貝類學を研究せんとするものが、普通唯貝殻のみを以て、種屬を判定せんとすることの甚だ不得策たるを熟々感じました。前述の通り唯貝殻のみに依て鑑定すると、何人と雖も *Blanfordia* 少なくとも之れに近屬のものと認めまして、全く別科にこれを編入することに成ります。過てる者は獨り余輩のみでなかつたことを後に發見しました、即ち平瀬氏は前に北米費府のピルスブリー氏の許にこれを送られましたから、竊に其の消息を待て居りました、同氏は現今米國唯一の貝類學者で、私も毎度書面を以て教を受けて居る大家であります。然るに昨秋五島博士より書面にて、ピルスブリーよりの來狀に依ると、同氏は此の貝に *Blanfordia minor* の新種名を附し、發表する考だと申して參つたが、既に英國の某雜誌に發表されてあると傳承せしゆゑ、其の雜誌の名を知らして貰ひたい、左すればこれを同氏に報じて遣りたいといふことでありました。余想ひらく流石の鑑識あるピルスブリー氏もこれを解剖する便なく、唯貝殻のみを比較した爲に、全く余輩と同様の誤解に陥つたものと考へ、旁々貝の種屬を決せんとするには、何うしても解剖に依らざるを得ないことを深く感じたのであります。

片 山 病

理科二部四年

}	奥 村 ぶ み
	安 達 智
	森 口 さ よ

片山病ハ廣島縣山梨縣佐賀縣ノ或ル地方及ビ支那ノ或ル地方ニ流行スル一種ノ地方病デゴザイマス。此ノ病氣ノ初メテ發見セラレタノハ廣島縣ノ片山村デ、而カモ此ノ地方ニ限ラレテ居タ爲ニ其ノ名ガ出デ山梨縣デハ山梨病ト申スサウデス。

一体此病氣ハ隨分不思議ナモノデ、元氣デ居タ人モ病ニ犯レテハ手足ヲ藻搔イテ苦ミ體ガ熱クナツテ意識ガ朦朧トナリ、讒言ヲ云ツタリスル故科學ノ進歩シナカッタ昔ハ單ニ宗教的迷想ニ驅ラレテ神佛ノ罰デハナイカト思ヒ頻リニ神ヤ佛ニ向ツテ平癒ヲ祈ツタナドハ無理ナラヌコトデアリアス。今デハ科學進歩ノ御蔭デ病ハ外界ノ刺戟或ハ外物ノ侵入ニ依リ、人体ヲ構成シ居ル組織ヤ機官ノ實質ニ變化ヲ及ボシ爲ニ其ノ機能ヲ妨碍シ、延テ精神上ニモ影響スルモノト考定セラル、ヤウニナリマシタ。此ノ病ヲ起ス外界ノ刺戟及ビ外物、即チ病原ニハ様々アリマスガ、食物又ハ空氣ヨリ來タルモノ最モ多ク遺傳ニヨルモノハ寧ロ少ナイ方デアツテ病原蟲ヤ病原菌ニ因ルノガ普通デアリマス。